

マナーと作法の社会学

加野芳正

編著

はじめに

私たちの日常生活を秩序づけるものとして「マナー」や「作法」の領域がある。マナーは「ヒトが自己あるいは他者のもつ動物性の次元になるべく直面しないですむよう作り上げた一種の身体技法」(見

田宗介他編 一九八八、八三三頁)と定義することができる。それは多くの場合、教育や躾を通して身体化される。マナーの精神の根底にあるのは他者に対する配慮であり、自分勝手な行動を抑制し、快適な市民社会を維持することである。マナーは文化によつても異なつてゐる。日本の高校野球やプロ野球では相手を三振に取つたり、殊勲打を打つたりすると、体全体に喜びを表出すること(例えばガッツボーズなど)が許されるが、アメリカではこのような行為は相手に配慮しない失礼な行為として、一般には歓迎されない。このことはアメリカに渡つて活躍する田中将大投手やダルビッシュ投手を見ていれば明らかだろう。相撲では、勝つても土俵上では喜びを表情に出さないことが求められる。元横の朝青龍が優勝を決めた相撲の後でガッツボーズをし、多くの相撲ファンからマナー違反であるとしてひんしゅくをかつたことを覚えている人も多いだろう。彼は敗者に対する配慮が足りない、奥ゆかしさがないなどの印象を持たれた。相撲では感情を表出しないのが礼儀(マナー)となつてゐるのである。つまり、「マナー」や「礼儀作法」はそれ自体が合理的根柢を持つてゐるわけではなく、社会の伝統や慣習のなかに位置づいてゐると考えることができる。

マナーは、法と道徳の中間に位置づく準ルールであると言われる(天野 二〇〇八、二三九頁)。法律(ルール)、マナー、道徳はいずれも個人の勝手な振る舞いを制限し、社会の秩序を守るものであるが、それぞれの違いはどこにあるのだろうか。第一章では、マナーと作法とはそもそも何であるのか、マナーを研究することにどのような意味があり、それを研究することで人間や社会のどのような側面が明らかになるのか、これらの問いに言及することによって、二章以下の各論文へと橋渡しをしていきたい。

1 ルール・マナー・道徳

「ルール」と「マナー」は、同列のものとしてしばしば用いられる。しかし、ルールとマナーは同じではない。ルールのなかには国民全体を拘束する法律、自治体が制定する条例、コミュニケーションや組織を単位として人びとの活動を制限するルールなどがある。法律を破ればペナルティを受ける。その法律のなかには、殺人、強盗、窃盗など刑法によつて厳しく罰則を受けるものもある。また、法律ではないが、八時までは登校する、試験において不正を働いたら謹慎処分になるといた、学校などのそれぞれの組織やコミュニケーションが決めているルールがある。法律は社会的、制度

的に認知されており、ルールのなかでもつとも厳格なものであるが、いずれにしてもルールは守らなければならない。ルールが守られないとき社会はアノミー状態に陥ってしまう。ルールの特徴は、それが明文化されているという点である。「暗黙のルール」という表現もあるが、基本的には、法律、条例、規則、規定、ルールという形で明文化されており、だからこそ、違反者に対してはサンクションを加えることができるのである。「マネーにもマナー」という消費者金融のコマーシャルがあつたが、お金を借りたら返すのが当たり前で、これはマナーの問題ではなく、ルールの問題である。

これに対してマナーは、どうしても守らなくてはならないものではない。それは個人の裁量に任さ

れている点に特徴がある。挨拶をする、電車のなかでは大声で話さない、身だしなみを整えるといった行為は、マナーに属するものである。マナーを破ると、時として叱責されることもあるが、罰則は加えられない。なぜなら、マナーはどうしても守らなければならないものとして強制される性質のものではなく、個人の裁量に任せられているからである。その代わり、マナーが守れない人は恥ずかしい思いをするし、他者から軽蔑のまなざしで見られることになる。

「道徳」と「マナー」はどのような位相にあるのだろうか。マナーには、携帯マナー、運転マナー、ビジネスマナー、テーブルマナー、冠婚葬祭マナーなどがあり、場面や状況に応じて細かく規定されている。このなかで、携帯マナーや運転マナーは「他者への配慮」という側面を強くもつており、マナーが無視されると迷惑行為となってしまう。それに対して、テーブルマナーや冠婚葬祭マナーは他者に迷惑をかけるというより、「しきたり」に対する配慮という側面が強い。マナーは品格や優雅さとも結びついており、それは礼法になつたきちんとした礼は、何よりもまず礼をするその人を美しくする(中野 一九九七、二八九頁)といつた表現のなかに端的に表れてゐる。いずれにしてもマナーには形があり、形として表現されなければならない。

「道徳」を大辞泉で引いてみると「人々が、善惡をわきまえて正しい行為をなすために、守り従わねばならない規範の總体。外的・物理的強制を伴う法律と異なり、自發的に正しい行為へと促す内面的原理として働く」とある。つまり道徳は内面的原理であり、それがルールやマナーと結びついて、行為として表象される。事例として適切かどうかわからないが、ヤクザは礼儀作法を重視する。「一番マナーのきちんとしているのはヤクザです。これはヤクザの世界は序列が決まつてゐる」(口のきき方まで決まつていますから)といふ(青年心理 一九九一、五頁)。しかし、ヤクザの行為は道徳的とは言えないだろう。なぜなら、親分に対する礼儀正しいかも知れないが、一般の人びとに対しては虚勢を張り、しばしば暴力に訴える存在だからである。彼らは道徳的でもなければ、遵法精神に溢れているわけでもない。また、ヤクザの礼儀作法は美しくもなければ、品格があるとも言えない。彼らはヤクザ世界という特殊な管理社会のなかで、ある種のマニユアルにしたがつて生きているだけである。法律やルールを遵守して行動するか否か、マナーを尊重するか否か、それは道徳心の持ち方によつて大きな影響を受ける。道徳はマナーとルールの双方に関わつてその在り方を決定する要諦(上杉 一〇一一、一〇四頁)といふことができる。

以上、ルール、マナー、道徳の相違を考えると、「強制力を伴つて現れるルールと、自発性と良心に任されているマナー」「個人の内面的原理である道徳と、形の問題として現れるマナー」と整理することができるだろう。